

先人の知恵から

9

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

様々な諺を紹介しつつ、今の子育てや支援を顧みる。変わってもよいもの、変わらない方がよいもの、そして変えるべきもの、変えてはいけないもの、世の中にはこの4つがあると思う。子育てや子育て支援にも同様のことが言えると思う。何を残し、何を变えていくのかは、その社会、環境によっても異なるだろうが、それでも全世界共通のもの、普遍的なものもあると諺を見ていて思う。昔のことばが今の人たちにどのくらい届くか分からない。でも今多くの親が、祖父母が子育てや孫育てに悩んで居る時だからこそ、こうした古い言葉が腑に落ちることもあるかもしれないと思う。今回はう行から次の5つ。

- うそ ほうべん 嘘も方便
- 打たれても親の杖
- 内に誠あれば外に出る
- 内弁慶の外地蔵
- うま 旨い事は二度考えよ

<嘘も方便>

嘘をつくことは良くないが、時と場合によっては物事を円滑に運ぶための手段として必要だという事。方便は元仏教語で、仏が衆生を救って、悟りの世界へ導くための便宜的な方法・手段の事。「嘘も誠も話の手管」「嘘は世の宝」等も類義。

一般的には、正直であれとどこの家庭でも子どもに教える。「嘘は泥棒の始まり」とかジョージ・ワシントンと桜の枝の話も有名で、正直であることを勧める話は沢山ある。しかし嘘についてはいけないと言われたことで正直にばかり言っていたら、やはり様々な歪みが生まれる。

一体いくつくらいから子どもに嘘を言うことも時には必要と伝えるべきだろうか？教師だって両親だって嘘をつく。それに気付くのは小学校の中学年くらいからだろう。大人が嘘をついたり誤魔化したり、約束を破ったりしているのを見ながら、子どもた

ちも少しずつ嘘をつくこともたまには必要なのだと学んでいくし、大人は必ずしも正しくないと感じる。

真実を伝えたら余計に傷つくときは嘘を言うことも多いだろう。友達との遊ぶ約束も、別の友達と約束して居たらどうやって断るか。小学校低学年だとそのままストレートに「〇〇ちゃんと遊ぶ約束しているから遊べない。」と断っているのを見かける。成長してくると「今日は家の人と出かけるからごめん、遊べない。」と断る。その結果、他の友達と遊んでいるところを見かけられてまずいことになる場合もある。人間関係の摩擦はこんなところでも見られ、それをどのように解決して行くかが大切な学びでもある。正直に言った方が良い時と、「嘘も方便」の時の見分けは、失敗しながら覚える物である。それを大人が先取りして、あれこれ指示してしまうと、失敗の経験が減る。

コミュニケーションが上手になるコツは、たくさんコミュニケーションを取り、たくさん失敗することだと思う。子どもたちが子ども同士の関わりの中で、どこで嘘をつき、どこで正直に話すかを学べる機会を大人が奪ってしまわないように気を付けて行きたいものだ。

英語では・・・

The end justifies the means. (目的は手段を正当化する。)

又は

He that cannot dissemble knows not how to live. (偽ることを知らない人は生き方を知らない人である。)

<打たれても親の杖>

例え親に杖で打たれても、そこには子を思う慈愛の心がこもっているから、有難いものだということ。「打つも撫でるも親の恩」も類義。

この諺は虐待がうるさく言われる現代においては中々口に出しづらいかもしれない。

「打つ」とか「叩く」という言葉だけでもう既に「虐待」と判断されてしまう。しかし、ここで言う「打つ」は、ただ単に感情に任せて「打つ」とは違う。何処が大きく違うかと言えば、親の子に対する愛情、想いの有無であろう。

虐待する親たちが一様に言う言葉に「躰」がある。「躰のために殴った」と言うのだ。しかし、そこにあるのは「躰」ではなく、思い通りにならない子どもへの「怒り」である。シリーズの6回目で「一朝の怒りにその身を忘る」という諺を挙げたが、「怒り」による行動は良い結果を招かない。

一方伝統的な芸能や技術に対し、その伝承における指導には厳しいものもある。師匠は扇で手や足を打ったりして教えることもある。そうやって覚えさせられる時には、感情のままに叱られるわけではないので打たれる方も納得する。

職人技を教えるときには、「見て覚えろ」とか「見て盗め」とか言われ、指導をしてもらえるのは見込みがある時ということもある。自分の跡を継がせようと思えば当然指導が厳しくなる。叩かれたり殴られたりということも普通に見られたし、そこに師匠の思いがあると感じることが出来れば恨みになることもなかった。

そんな時代の名残の諺かもしれないが、

「叩くのは虐待だ」と言い過ぎることにも問題があるのではと思う。

今我が子を叩こうとしたり、叩いたりしている親に、子どもへの思いがどのくらいあるのか。感情をただぶつけていたり、八つ当たりだったり、親の身勝手な思いだけをしっかりと見極めることも必要ではないだろうか。そしてそれは、教育の現場でも言えることかもしれない。

叩くことを肯定するつもりはないが、万引きをしたわが子を父親が叩いたとしても、叩いた行為だけで判断せず、父親の子どもへの思いが、愛情が伝わってくるかどうかで判断できるだけの「ゆとり」を我々支援者は持つべきではないかと思う。

<内に誠あれば外に出る>

自分の心の中に誠意があれば、自然に言動などに現れて来るものだという事。「内」は「中」とも書く。出典は大学。

対人援助職として、対する人にどれだけの誠意があるかはその援助技術よりずっと大切である。下手でも一所懸命さがあれば、相手に必ず伝わる。反対にスキルばかりに頼ったり、自分は援助職としての全てを会得したと思っているおごりは、相手に不愉快な思いしか与えない。

上から目線な態度や言葉で対応している人を見かけることがある。認知症のお年寄りや子供たちに酷い言葉遣いをしているヘルパーや教師などに会うとがっかりする。

人柄と言うのは内からにじみ出るものである。それは、第一印象にも繋がるものか

もしれない。

以前民間企業で働いていた時に、お客様が対応した人に「お前の顔が気に入らない」と言うのを聞いたことがあった。生まれつきの顔についてとやかく言われても困るが、きっと顔だけの問題ではなく対応した者の醸し出す雰囲気が入らなかったのだと思う。

手馴れてきたときこそ、気を付けて行かねばならない。常に、わが身におごりが無いか、上から目線になっていないか、相手の事を第一に考えているか、自分の中身を、誠意の有無をしっかりと見据えて人に対処すべきであろう。内からにじみ出る誠を目指したいものだ。

<内弁慶の外地蔵>

家の中では弁慶のように強がり威張っているが、外では意気地が無くなる人の事。単に「内弁慶」ともいう。

この諺は子どもの家での態度の悪さに困っている親に度々使っている。家の外では借りてきた猫のようにお利口さんなのに、家では親の言うことに一々逆らったり文句を言ったり暴れたりする。子どもの一番悪い状態である。しかし、それはとりもなおさず家の中では、自分らしく居られるという事でもある。子どもにとって家がホッとできる場所だという意味でもある。だからと言って家庭内暴力に発展するようでは困るが・・・。

親に対し「この子の最悪の姿を親が知っているということは安心でしょう。だって、

家の外ではこれ以上悪いということはないのだから。内弁慶は外弁慶より安心。ね!？」と話している。

反対に、外弁慶であったらどうだろうか？家では良い子だが、外では悪い子となる。すると保護者にはその子の本当の姿が分からない。学校で余りに悪い事ばかりするからと保護者を呼び出すと「うちの子はとても良い子でそんな悪いことするような子ではありません。」と言うことがままある。こういう子の場合は本当に家ではとても良い子なのだろう。子どもの悪い姿を全く知らない程怖い事は無いのではないかと思う。

英語では・・・

Every dog is a lion at home. (どこの犬も家の中ではライオンである。)

<旨い事は二度考えよ>

上手い話には、危険や落とし穴があったりするから、すぐには飛びつかず、よく検討し慎重に行動せよということ。「旨い物食わず人に油断すな」も類義。

今投資すると倍になるとか、詐欺が成り立つのは欲をかく人がいるからであろう。子どもに関する情報にもこうした「上手い話」が度々見受けられる。

子育てに自信を持ってない親たちは、ネットなどで調べた情報に振り回され、必要もない物を買ってみたり、大金をはたいて「子どもの〇〇がよくなる」とか「能力開発」の効果があると謳われている物を手に入れている。

子どものためにはお金に糸目をつけないという親も多い。だからこそ、詐欺まがいの物にも引っ掛かってしまう。上手い話には大抵裏がある。ネット情報も鵜呑みにせず、保健師や支援者の話を聴いてみることを勧めている。

今回はここまで。

出典紹介

大学

一卷。孔子の遺書とも子思または曾子の著作ともいう。もと「礼記」中の一篇（第四十二）であったが、宋代以後、単行本として独立し、朱熹（朱子）がこれを四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）の一つとしたことから、特に広く読まれるようになった。修身、齐家、治国、平天下の道を説く。朱熹が全文を「経」と「伝」に整理し、三綱領（明德・止至善・新民）、八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下）の体系をたてた。